

青年期男女における性別役割の3側面間の関係

— 自己認知別にみた性別役割観及び性別役割行動（態度） —

福 井 康 之

（教育心理学研究室）

赤 澤 淳 子

（愛媛女子短期大学）

（平成7年4月28日受理）

性別役割 (gender role) は多面的なものであり、その多面性に応じて様々な分類が試みられてきた。これらを概観した飯野 (1984) は、結局のところ3者に集約できると主張している。それは、性別役割に照らし合わせて、自分自身をどのように評価しているかという自己評価の側面、性別役割規範や価値観及び好みなどが含まれる性別役割の認知的側面、性別役割の実現度・実行度という現実的な側面である。以下では、各々を、①「自己認知」、②「性別役割観」、③「性別役割行動」と称する。この三分説は、妥当なものとしてこれを採用する研究者が多い。以下でもこれを採用するものとする。そして、これらの3者のうち①・②に関しては、個別的な研究がかなりの程度まで蓄積されている。そのうち、本研究に関わるものに関して簡略に紹介しておきたい。

性別役割に関する「自己認知」とは、自分が女性的であるか、あるいは男性的であるかという認知である。1970年代後半までの女性性・男性性の概念は、二者択一的で同次元の両極に位置するものと考えられていた。これに従う限りは、人間は女性的か男性的かのどちらかでしかなく、両者ではあり得ないことになる。ところが、現実には Constantinople (1973) が指摘したように、実は両方であり得る事例も少なからず存在する。そこで、Constantinople は、従来の二者択一的な概念設定を採らず、女性性および男性性の概念を各々が独立した次元に属するという説を唱えるに至った。

それを承けて二次元モデルとして考案されたのが、Bem (1974) による BSRI (Bem Sex-Role Inventory) や Spence, Helmreich, and Stapp (1975) による PAQ (Personal Attributes Questionnaire) である。これらの尺度では、男性的・女性的・両性具有的・どちらとも言えない人のいずれかに分類される。そして、両性具有者 (アンドロジニー) は、多様な状況に対応できる適応的なタイプであることや、彼らがより高い自己評価のレベルを示すことを見いだした。

また、「性別役割観」に関しては、性別役割の評価に関する調査を試みた伊藤 (1978) の研究結果が非常に興味深い。伊藤は、女性が男性にも女性にも必要とされる Humanity に最も高い価値をおいているのに対し、男性では、Humanity と男性役割とにほぼ同等の価値をおいていることを明らかにした。この結果を分析・考察した伊藤は「男性は男性役割を積極的に受容しているのに対し、女性は女性役割を否定的にしか受容し得ず、それに代わるものとして Humanity が位置づけられている。このことは、伝統的に規定された女性役割と現実には女性が

欲している役割とのギャップを示唆する事に他ならない」と述べている。

Humanity とは、しばしばこれに対する訳語として当てられる「人間性」という訳語を見ても分かるとおりで、男女を問わない、あるいはそもそも性差を超越した人間の属性である。したがって、それを「両性具有」と置き換えることが許されるとするなら—もちろん、そのためにはいくつかの前提を満たすことが必要であるが—、女子では、自己両性具有者として認知するものが多く、男子では男性的であるという性典型者か、あるいは両性具有者として認知するものが多いという予測が成り立つ。

ところが、自己認知と性別役割観に関する研究の豊穡さに比して、性別役割行動やこれら 3 者間の関係に関する研究は、意外な感さえ抱くほど、乏しいのが現状である。これは、現実行動というものが調査しにくいという理由によるものであろう。よって、行動に関しては、その準備状態としての態度が調査されているのが現状である。また、3 者間の関係に関する研究については、この分野における従来の代表的な所説として言及されるのが、3 者が互いに無関係であるとする 30 年以上前に提案された Lynn (1959) の説であることが、その間の事情を雄弁に物語っている。しかし、上述のように性別役割の個別的な側面に関する研究が蓄積されつつある現在、この説は全面的な見直しの対象と成りつつある。

たとえば、すでに赤澤 (1995) が報告したように、性別役割行動(態度)を選択するものは、選択しないものに比べ、性別役割に対して、より肯定的な見解をもっている。つまり、②と③とは密接に関わりあっているのである。また、Bem (1975) は、性典型者と判定された被験者が選択するのは、「明らかにその性にふさわしくない行動」ではなく、「ふさわしい行動」の方であるのに対して、両性具有の被験者は一貫性がなく、個々の具体的な状況に即して性別役割を選び分けていることを指摘している。すなわち、①と③との間には深い関係があると考えてよい。

こうしてみると、通説が成立する基盤が大きく揺らいでいること、さらに、通説の妥当性が成立する可能性を最終的に左右するのは、①と②の関係であることは明かである。そこで、本論文では、先の予測に基づき、これら両者の関係を検討し、通説に対してさらなる検証を試みたいと考える。

以下では、Bem の設定した尺度を参考とし、具体的には次の 3 つの仮説の当否を検証することを通じて、自己認知の違い (①) が性別役割観 (②) および個人の行動 (③) とどう関わりあっているか、を検討する。

- 仮説 1 女子では、両性具有者として自己を認知するものが多く、男子では男性的であるという性典型者、あるいは両性具有者として自己を認知するものが多い
- 仮説 2 性典型者 (女子では自己を女性的と認知するもの、男子では自己を男性的と認知するもの) は、そうでないものより、性別役割に対して肯定的である。
- 仮説 3 性典型者は、そうでないものより、自分の性に属する性別役割行動 (態度) を選択する。

方 法

(1) 調査時期

1994年10月下旬～11月中旬。

(2) 調査対象

4年制国立大学教育学部男子103名、女性276名。

(3) 調査方法

質問紙法による調査用紙を作成した。調査用紙は、大学の講義を利用しして配布し、集団で実施した。その場で回答した群と、持ち帰って回答させ、後日回収した群がある。

(4) 調査内容

I. 自己認知の側面について、以下の6項目の中から、最も当てはまるものを1つ選択させた。Bemらの手法によれば、男女の特性を示した形容詞に対して現実自己像を評定させ、その得点によって、女性的～男性的を判定するのであるが、今回の調査では、ストレートに質問している。(以下、Aから順に、女性的、やや女性的、両性的、やや男性的、男性的、中性的と略称する。)

- A. 私は女性的である
- B. 私はどちらかといえば女性的である
- C. 私は女性的でもあり、男性的でもある
- D. 私はどちらかといえば男性的でもある
- E. 私は男性的である
- F. 私は女性的でも男性的でもない

II. 性別役割観については、性別役割に対する自己の見解を測定する質問項目を作成した。調査では、4段階評定を行い、得点化は、各尺度に対して肯定的な回答を表す方向から順に1～4点を与えた。また、性別役割の例としては、青年期男女にとってできるだけ身近な役割を検討した。その結果、「女は男に料理を作る」「男は女より優秀」「セックスで男は女はリードする」「女は男の身のまわりの細かい気遣いをする」「男は女に食事をおごる」「女は、子どもや病人の世話をする」という6種類を設定した。以下それぞれ、「料理」「優秀」「リード」「気遣い」「食事代」「世話」と略称する。このうち、「料理」「気遣い」「世話」は、女性に対する性別役割であり、「優秀」「リード」「食事代」は、男性に対する性別役割であると考えられる。

III. 性別役割行動(態度)については、先の6種類(料理・優秀・リード・気遣い・食事代・世話)の規範に即した性別役割行動(態度)を測定する質問項目を作成した。その際、行動そのものにできるだけ近づけるために、具体的な場面を想定し、そこで展開される性別役割行動を取り上げた。調査では、「～しようと思う」「なるべく～しようと思う」「あまり～しようとは思わない」「～しようとは思わない」という4件法を用いた。得点化に際しては、質問に対して、肯定的な回答を表す方向から順に1～4点を与えた。

結 果

1. 自己認知

自己認知を Table 1 に示した。

女子では、自己認知は、「兩性的」>「やや女性的」>「やや男性的」>「女性的」>「中性的」>「男性的」の順に多かった。男子では、「兩性的」=「男性的」>「やや男性的」>「やや女性的」>「中性的」>「女性的」であった。つまり、結果は仮説 1 と合致している。

Table 1：青年期男女における自己認知

	女子 (N=276)		男子 (N=103)	
	人数(人)	比率(%)	人数(人)	比率(%)
女性的	12	4.3	1	1.0
やや女性的	68	24.6	5	4.9
兩性的	148	53.6	32	31.1
やや男性的	34	12.3	31	30.1
男性的	6	2.2	32	31.1
中性的	8	2.9	2	1.9

2. 自己認知別にみた性別役割観

青年期男女における、自己認知別にみた性別役割観の平均値と群間の分散分析の結果を Table 2, Table 3 に示した。男子では、人数に偏りがあるため、「女性的」及び「やや女性的」を一つの群にまとめ、「中性的」に関しては除外した。よって、男子では、「女性的」(実質は、「女性的」と「やや女性的」)、「兩性的」,「やや男性的」,「男性的」の 4 群とした。結果は、女性においては、仮説 2 と合致しており、男子においては仮説は成立しなかった。

まず、女子では、6 群間の分散分析の結果、「料理」($F(5, 270) = 3.67, p < .01$)、「優秀」($F(5, 270) = 2.56, p < .05$)、「リード」($F(5, 270) = 2.48, p < .05$)、「気遣い」($F(5, 270) = 2.43, p < .05$)において有意差が示された。さらに、LSD(最小有意差検定)の結果、①「料理」という性別役割について、「中性的」は「女性的」・「やや女性的」・「兩性的」より、また、「やや男性的」は「女性的」・「やや女性的」より否定的な見解を持っていること、②「優秀」という性別役割について、「やや男性的」は「やや女性的」・「兩性的」

Table 2：青年期女子における自己認知別にみた性別役割観

自 己 認 知	女性的 (N=12)	やや女性的 (N=68)	兩性的 (N=148)	やや男性的 (N=34)	男性的 (N=6)	中性的 (N=8)	F 値 F (5, 270)
料 理	2.50 (1.00)	2.65 (0.91)	2.84 (0.97)	3.18 (0.83)	3.33 (0.82)	3.75 (0.46)	3.67**
優 秀	3.50 (0.52)	3.22 (0.81)	3.36 (0.76)	3.74 (0.51)	3.67 (0.52)	3.50 (0.76)	2.56*
リ ー ド	2.42 (0.90)	2.38 (0.77)	2.63 (0.91)	2.65 (0.81)	2.00 (0.63)	3.25 (0.71)	2.48*
気 遣 い	2.58 (0.79)	2.34 (0.84)	2.58 (0.94)	2.82 (0.83)	2.67 (0.82)	3.25 (0.71)	2.43*
食事代	3.33 (0.98)	3.03 (0.77)	3.28 (0.77)	3.35 (0.77)	3.00 (0.89)	2.88 (0.99)	1.61
世 話	2.67 (0.65)	2.68 (0.84)	2.86 (0.87)	2.94 (0.89)	2.83 (0.75)	3.13 (0.83)	0.86

() 内は標準偏差 * ; $p < .05$, ** ; $p < .01$

Table 3: 青年期男子における自己認知別にみた性別役割観

自己認知	女性的 (N=6)	両性的 (N=32)	やや男性的 (N=31)	男性的 (N=32)	F 値 F (3, 97)
料理	2.83 (1.17)	2.47 (1.05)	2.97 (0.98)	2.41 (0.98)	2.02 ⁺
優秀	3.67 (0.52)	3.13 (0.90)	3.32 (0.70)	3.25 (0.76)	0.92
リード	2.83 (1.33)	2.34 (1.12)	2.74 (0.93)	2.34 (0.97)	1.27
気遣い	3.00 (1.10)	2.41 (1.01)	2.97 (0.84)	2.34 (0.94)	3.18 [*]
食事代	3.67 (0.82)	2.44 (1.08)	2.81 (1.11)	2.77 (0.96)	2.55 ⁺
世話	3.17 (1.17)	2.88 (0.94)	3.03 (0.91)	2.72 (0.99)	0.73

() 内は標準偏差 + ; $p < .10$, * ; $p < .05$

より否定的な見解を持っていること、③「リード」という性別役割については、「中性的」は「女性的」・「やや女性的」・「両性的」・「男性的」より否定的な見解を持っていること、④「気遣い」という性別役割について、「中性的」は「やや女性的」・「両性的」より、また、「やや男性的」は「やや女性的」より否定的な見解を持っていることが明らかになった。

次に、男子では、4群間の分散分析の結果、「気遣い」($F(3, 97) = 3.18$, $p < .05$)において有意差が示され、「料理」($F(3, 97) = 2.02$, $p < .10$), 「食事代」($F(3, 97) = 2.55$, $p < .10$)において傾向差が示された。更に、LSDの結果、①「気遣い」という性別役割について、「やや男性的」は「両性的」・「男性的」より否定的な見解を持っていること、②「料理」という性別役割について、「やや男性的」は「男性的」より否定的な見解を持つ傾向があること、③「食事代」という性別役割について、「女性的」は「両性的」より否定的な見解を持つ傾向があることが示された。

3. 自己認知別にみた性別役割行動(態度)

青年期男女における、自己認知別にみた性別役割行動(態度)の平均値と群間の分散分析の結果を Table 4, Table 5 に示した。結果は、女性においては、仮説3と合致しており、男子においては仮説は成立しなかった。

Table 4: 青年期女子における自己認知別にみた性別役割行動(態度)

自己認知	女性的 (N=12)	やや女性的 (N=68)	両性的 (N=148)	やや男性的 (N=34)	男性的 (N=6)	中性的 (N=8)	F 値 F (5, 270)
料理	1.25 (0.45)	1.60 (0.63)	1.68 (0.78)	2.00 (0.85)	2.17 (0.75)	2.50 (0.76)	4.54***
気遣い	1.50 (0.52)	1.53 (0.78)	1.51 (0.65)	2.00 (1.02)	1.67 (0.82)	1.88 (1.13)	2.74*
世話	1.17 (0.39)	1.29 (0.62)	1.29 (0.55)	1.53 (0.71)	1.67 (0.82)	1.38 (0.52)	1.54

() 内は標準偏差 * ; $p < .05$, *** ; $p < .001$

Table 5：青年期男子における自己認知別にみた性別役割行動（態度）

自己 認知	女性的 (N=6)	両性的 (N=32)	やや男性的 (N=31)	男性的 (N=32)	F 値 F (3, 97)
優 秀	2.00 (0.52)	2.16 (0.90)	2.32 (0.70)	2.00 (0.76)	0.75
リード	1.67 (0.52)	1.97 (0.82)	2.03 (0.80)	1.81 (0.69)	0.70
食事代	2.83 (1.17)	1.94 (0.84)	1.90 (0.70)	2.09 (0.64)	2.75*

() 内は標準偏差 * ; $p < .05$

まず、女子では、6群間の分散分析の結果、「料理」($F(5, 270) = 4.54, p < .001$)、「気遣い」($F(5, 270) = 2.74, p < .05$)において有意差が示された。さらに、LSDの結果、①「料理」において、「女性的」は「やや男性的」・「男性的」・「中性的」より性別役割行動を選択していること、また、「やや女性的」・「両性的」は「やや男性的」・「中性的」より性別役割行動を選択していること、②「気遣い」において、「女性的」・「やや女性的」・「両性的」は「やや男性的」より性別役割行動を選択していることが明らかになった。

次に、男子では、4群間の分散分析の結果、有意差が示されたのは、「食事代」($F(3, 97) = 2.75, p < .05$)のみであった。さらに、LSDの結果、「食事代」という性別役割において、「女性的」は他の3群より性別役割行動の選択に対して否定的であることが明らかになった。

考 察

以上の結果から次のことが考察できる。

最初に「自己認知」についてであるが、仮説1は立証され、女子では、男性性も女性性も併せ持っている両性具有者として自己認知するものが多く、「男性的」もしくは「女性的」という性典型者として自己認知するものは少ない。これに対し、男子では、男性的であると自己認知するものが多い反面、女性的であると自己認知するものは少ないのである。これは、自己認知に関する調査結果が、先に述べた性別役割観に関する伊藤(1978)の見解と符合することを示している。このことから、自己認知と性別役割観の間には、何らかの関係があることが窺える。

次に、自己認知別にみた性別役割観および性別役割態度に論及する。女子に関しては、自己を女性的であると認知したものは、女性的であると判断しなかったものより、固定的な性別役割観を持ち、性別役割行動の選択に対して肯定的である。また逆に、自己を女性的であると認知しなかったものは、性別役割に対して否定的な見解及び態度を示している。つまり、性典型者は、そうでないものより、性別役割に対して肯定的な見解をもつと同時に、自分の性に属する性別役割行動の選択に関してはより肯定的なのである。以上から、女子に関しては、仮説2及び仮説3が立証されたと見なして差し支えないであろう。

一方、男子に関しては、「男性的」・「両性的」と自己認知するものは、「やや男性的」・「女性的」と自己認知するものに比べ、より固定的な性別役割観をもつことが示された。また、男子では、「女性的」と自己認知するものは、そうでないものより、性別役割行動の選択に対し

て否定的であることが示された。さらに、性別役割観の場合とは異なり、「男性的」、「やや男性的」、「両性的」の3者間における差も出ない。これらの結果から、男性的と自己認知するものは、性別役割行動の選択に対して肯定的であると結論して差し支えないであろう。

以上の結果を見る限りでは、男子に関しては両仮説が立証されなかったことになる。しかしながら、今回の調査では、男性性と女性性を併せもった中間項として「両性性」が設定されているだけで、そのいわば配合比率は言明していない—もちろん、言明が可能か否かは問題となるのだが—。したがって、男性的であると回答したものと、両性的であると回答したものとの、どちらがより男性的であるかは、「男性・両性」という字面を見ただけでは判断できない。場合によっては、「両性的である」と回答したものの方が、実は「男性的である」と回答したものより男性性が高いことも、理論的にはあり得るわけである。

そう考えるなら、今回の調査結果からだけでは、「自己を男性的ではないと認知したもの—両性的と認知したものを含む—は、男性的と認知したもののほどは、固定的な性別役割観をもってはいない」という解釈の可能性までが、完全に否定されたわけではないと見るべきであろう。さらに、この解釈が成立するなら、男子に関しても両仮説は、誤謬であると立証されたわけではないということになる。つまり、少なくとも立証の可能性は残されていると見てよい。今後さらに様々な方向から、この仮説が立証可能か否かを検討する所存である。いずれにせよ、今回の研究結果によって、通説のよって立つ根拠が一層揺らいだことは明らかであると考えてよいであろう。

要 約

本論文では、性別役割の3側面間の関係を検討することを目的とした。そのため、青年期男子103名、女子267名を対象に、Bem の設定した尺度を参考とし、青年期男女における自己認知別に、性別役割観および個人の行動（態度）の違いを検討した。主な結果は、以下の通りである。1）女子では、両性具有者として自己を認知するものが多く、男子では男性的であるという性典型者、あるいは両性具有者として自己を認知するものが多い。2）女子では、性典型者（女子では自己を女性的であると判断したもの）は、性別役割規範に対して、より肯定的である。3）女子では、性典型者は、そうでないものより、自分の性に属する性別役割行動（態度）の選択に対して、より肯定的である。尚、今回の調査では、男子については性別役割の3側面の関係を明らかにできなかった。今後さらに検討する所存である。

参 考 文 献

- 赤澤淳子 1995 青年期におけるジェンダー・ロールの認知と受容 （未公開修士論文）
- Bem, S. L. 1974 The measurement of Psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*. Vol. 42, No. 2, pp. 155-162.
- Bem, S. L. 1975 Sex role adaptability : One consequence of Psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*. Vol. 31, pp. 634-643.
- Bem, S. L. 1976 Sex typing and androgyny : Further explorations of the expressive domain. *Journal of Personality and Social Psychology*. Vol. 34, pp. 1016-1023.
- Bem, S. L. 1977 On the utility of alternative procedures for assessing psychological androgyny. *Journal of*

- Consulting and Clinical Psychology. Vol. 45, No. 2, pp. 196-205.
- Constatinople, A. 1973 Masculinity-Femininity : An exception to a famous dictum? Psychological Bulletin. Vol. 80, No. 5, pp. 389-407.
- 飯野晴美 1984 「性役割」という概念の多面性について 心理学評論, Vol. 27, No. 2, pp. 158-171.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 第26巻, 第1号, pp. 1-11.
- 神田道子 1983 女たちのゆくえ 勁草書房
- 柏木恵子 1973 現代青年の性役割の習得 依田新他(編) 現代青年の性意識 金子書房 pp. 101-139.
- Lynn, D. B. 1959 A note on sex differences in the development of masculine and feminine identification. Psychological Review. Vol. 66, No. 2, pp. 126-135.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究(Ⅱ) 追手門大学文学部紀要, 23号, pp. 19-36.
- 三川俊樹・井上知子・芳田茂樹 1993 新性役割尺度の構成に関する研究 追手門大学文学部紀要, 28号, pp. 1-17.
- Spence, J. T., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex-role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. Journal of Personality and Social Psychology. Vol. 32, pp. 29-39.
- Taylor, A. 1986 Sex roles and aging. In D. J. Hargreaves and A. M. Colley (eds.), The Psychology of Sex Roles, London : Harper and Row.
- Taylor, M. C. & Hall, J. A. 1982 Psychological androgyny : theories, methods, and conclusions. Psychological Bulletin, Vol. 92, No. 2, pp. 347-366.